所　感

日ロ関係史の中の一風景

土　手　健　作*

日ロ関係には150年以上の歴史があると一般に言われるが、さらにその150年以前から続く、もっと注目していい日ロ間の、ある一つの歴史上の風景が存在する。

それは、18世紀初めロシアには、すでに「日本語学校」ができていたという事実に関連することである。

ロシア人が自らの国家を有したのは遅く、ロシア国家の決定的な成立は、4・5百年前の15・6世紀にすぎない。

その国が、国土の東限であったウラル山脈を越えて東方に大きく膨れ上がってくるのは、16世紀末からである。領土そのものを拡大するというよりは、シベリアの森林（タイガ）に生息する毛皮獣を求めたものであった。

その尖兵を担うコサックと呼ばれる異形の集団が、ウラル山脈を越えてから、100年かかって西シベリアから東シベリアへ、そして極東のベーリング海に達し、とうとう東端があることを知った。さらに、この東端の半島（カムチャツカ）を南進、その南端の海に列島が連なり、その先には蝦夷島という大島があることを知ることとなった。

そのころには、シベリアの「走る宝石」といわれた「黒テン」は獲り尽くされ、カムチャツカから千島（クリル）にふんだんにいたラッコがこれに代わっていたのであるが、この時期に、ロシア皇帝・ピョトール大帝の「カムチャツカ征服」の命を受けたコサックの五十人長・アトゥラソフが、原住民の捕虜になっていた一人の日本人漂流民に出会うことになる。

記録に残る最初の日本人漂流民である。カムチャツカ南部に漂着して4年後、名は伝兵衛、大坂谷町の質屋「万九」の若旦那であった。伝兵衛は、ロシアの都モスクワへおくられ、ピョトール大帝にも拝謁し、そこで日本事情を物語った。1701年－元禄14年、赤穂浪士討ち入りの年のことであった。

「船は商品を金貨・銀貨と交換するために江戸に向かったこと。」

「金銀の貨幣は、都と江戸の二カ所で製造されること。」

「殿堂や神社は金銀で覆われていること。」

このようにしてロシアは、直接日本人から、日本に関する情報を初めて得て、東方の風変わりで豊かな文明の国に対する期待を膨らませたのである。

ロシアは、シベリアから極東のカムチャツカに至るまで、要所々々に兵を駐屯させ、官吏を置き、毛皮商人や毛皮とり労働者のための町をつくっていった。しかし、食料と衣類は慢性的に欠乏し、たえず飢えと野菜不足による壊血病に悩まされていた。一時、シベリアの一大拠点であるイルクーツクと、モンゴル高原の庫倫（クーロン）（現在のウランバートル市）との間に通商路を開いたこともあったが、中国の服飾生活の中で黒テンやラッコは必ずしも必要ではなく、一方、ロシア側としても中国の食料を買い付けたところで、遙かオホーツクやカムチャツカ半島に陸路送るということでは、問題の解決にならなかった。

そんな状況の中で、日本列島を知ったわけで、ロシアと日本との因縁は、ロシアのシベリア・極東における飢えと渇きから起こったといってよい。

当時の日本・江戸期における漂流民の頻発は、鎖国政策により外洋に乗り出すような航洋船（機造船）の建造は禁止されていたことに大いに関係している。「マストは必ず一本、大きさは千石を超えざること。」といった禁令があったため、航海には常に危険が伴った。カムチャツカ付近は、今も昔も低気圧の墓場で、日本近海で吹き飛ばされた廻船は、カムチャツカ付近に漂着することがしばしばおこったのである。

記録にある日本の最初の漂流民・伝兵衛は、その後ロシア語の読み書きを教えられ、1705年にペテルブルグに開設された日本語学校の教師にされた。続く日本人教師として「サニマ」、「三右衛門」、「宗蔵」、「権蔵」といった名が記録にある。1736年に、ロシア科学アカデミに付属して日本語学校が開設された。正規の日本語学校の最初のものである。この日本語学校の主幹アンドレイ・ボグダノフという人物は、三右衛門の子であったという説もあるし、いや実は伝兵衛の子だという歴史家もいる。

薩摩の人・権蔵は、1738年（「吉宗」の時代）世界最初の露日辞典を著し、その翌年21歳の若さで没する。ロシア科学アカデミーは、その業績を記念して彼のデスマスクをつくり、今はレニングラード民族研究所に保存されている。この辞典、権蔵は薩摩方言しか知らなかったため、「露薩」辞典になっており、今では、逆に18世紀初めの薩摩方言研究に貴重な資料になっている。

伊勢の漂流民・大黒屋光太夫らがイルクーツクに着いたのは、それから約50年後のことである。このころには、日本語学校は、ロシア東方経略の基地イルクーツクに移されており、光太夫の仲間のうち、庄蔵、新蔵はそこに残り、日本語教師になる。1792年に光太夫らが帰国することになるのだが、これと入れ替わるように仙台若宮丸の善六が漂着する。その善六は、12年後の1804年に、日本人漂流民を乗せた第2回目の遣日使節の通訳として同船している。

このようにして、日本語学校は、ナポレオン戦争後の1816年に閉鎖されるまで、時には日本人教師7人の最盛期をはさみ、断続的にではあるが、実に90年の間存続した。

その180年後のいま、ロシア極東では日本語教室のブームがおきているという。

考えてみれば、日本の鎖国政策が結果としてロシアへの漂流民を生じさせることになった。そして、ロシアへの漂流日本人は、ロシアの日本への接近の準備に力を添えることになつたのである。文化交流にも大きな役割を果たした。歴史の皮肉というべきか。

ロシアは、漂流日本人を日本に送還することを手段として、日本との通商関係の樹立を忍耐強く求め、あるいは日ロ間に生じた問題の解決を図ろうとした。その意味で、ロシアへの漂流日本人は、単なる海難事故者ではなく、多分に政治的な側面をもち、日本の開国への歴史と深く結びついている点に、もっと注目されてよいのではないか。

広大なロシアの国土、その右の翼を形成するシベリア・極東は、北海道に接する。

シベリア・極東開発を容易なものにしたいということにおいて、ロシアの日本、就中北海道をみつめる思いは、シベリア・極東が存在するかぎり、一貫した底流としていまも存続することを、初期の日ロ関係の歴史からすくいとることができるのではないだろうか。

*総務部長